2015スペシャルオリンピックス夏季世界大会･ロサンゼルスの状況と国内未普及競技の展望

A Study of the 2015 Special Olympics World Summer Games in Los Angeles and Future Prospects for the Domestic Spread of Special Olympics Movement Sports

井　上　明　浩
Akihiro INOUE

〈要旨〉

スペシャルオリンピックス世界大会実施競技の日本選手団参加状況及び，国内普及競技と未普及競技について報告した。今後は，一般競技団体が，普及振興を図るジュニア層や一般市民，高齢者と共に，障害者をその対象に含めるようになることを期待する。そしてスペシャルオリンピックス日本が，中央一般競技団体との連携を深め，指導者の派遣協力を要請すれば，地区組織においても協力要請が進展するであろう。逆に捉えれば，これまで健常者のみをその対象とし，障害者スポーツを蚊帳の外としてきた競技団体は，知的障害者をはじめとする全ての障害者をその対象として，競技の普及振興にあたることが，これからの競技団体の在り方とも言えよう。このことは，またスペシャルオリンピックスの全ての競技において慢性的なコーチ不足解消につながる可能性がある。さらに総合型地域スポーツクラブと協働し，一般的地域スポーツとして振興することを願う。

〈キーワード〉
スペシャルオリンピックス，未普及競技，インクルーシブスポーツ

1.　はじめに

2015年７月25日から８月２日の９日間，アメリカ合衆国ロサンゼルス市で，第14回スペシャルオリンピックス夏季世界大会が開催された。スペシャルオリンピックスは発祥がアメリカ合衆国であるため，夏季冬季世界大会は通算16回開催されており，内夏季大会は今大会を含めると11回開催している。同市の開催は，1972年第３回夏季国際大会[1]以来２回目の開催となった。今回の世界大会は，世界165カ国から約6,500人のアスリート，コーチ2,000人，大会運営員3,000人を超すボランティアに支えられ，500,000人の観客を集め盛大に開催された。[2]

この大会には，石川県から中村有里選手が日本選手団として３大会12年ぶりに代表入りした。彼女は筆者が長年指導する春風クラブの選手であり，筆者も渡米する機会を得たので大会を報告する。

今大会で14回を数える夏季世界大会に，開催された28公式競技（サッカーは11人制，７人制，５人制含む）に，日本は，水泳，陸上，バドミントン，卓球，テニス，ボウリング，ゴルフ，体操，バレーボール，バスケットボール，サッカー（７人制）の以上11競技に，選手77名，コーチ・役員35名，パートナー６名，計118名が参加した。前回アテネ大会の時は，選手52人，コーチ・役員23人計75人の日本選手団として臨んでおり，今回はそれを上回る数である。

スペシャルオリンピックスは，1950年代後半から1960年代初頭，ユーニス・ケネディ・シュライバーが，知的障害を持つ人々が不当に扱われていた状況に疑問をもったことに始まった。彼女の姉のローズマリーには，知的障害があった。1960年代を通してユーニス・ケネディ・シュライバーは，兄のジョン・ｆ・ケネディ大統領と自らがディレクターを務めるジョセフ p. ケネディ ジュニア財団の力でスペシャルオリンピックスを創設した。アメリカで始まったこの活動は，半世紀を過ぎ，４年に一度開催される世界大会は常に大規模で華やかな大会である。[3]

本研究では，1980年に日本スペシャルオリンピック委員会が設立された後，その組織が解散し，スペシャルオリンピックス日本が1994年に新たに設立された経緯の中で，世界大会自体への参加状況を改めて整理する。次にスペシャルオリンピックスが日本に導入されて，30年以上が経過する中で，未だ国内未普及競技があるのは何故なのか。今大

会においては，28公式競技中，日本がエントリーしたのは11競技である。知的障害者スポーツの世界最大の祭典であるスペシャルオリンピックスは，その公式競技として開催されるということは，世界的にそのスポーツが普及していることを意味している。つまりそれらの競技は，知的障害者スポーツにおける国際的競技とも言えるのである。本研究では，特に国内未普及競技についてその展望を述べる。

2.　世界（国際）大会の変遷と日本の参加

日本が，スペシャルオリンピックス世界大会に初参加したのは，1983年アメリカ合衆国ルイジアナ州バトンルージュで開催された第６回夏季国際大会からである。以来，２年ごとに開催されている夏季冬季両大会を通じて15回連続して日本選手団を派遣している。

世界（国際）大会変遷[(4)(5)(6)(7)(8)(9)(10)(11)(12)(13)(14)(15)(16)(17)(18)(19)]

第１回夏季国際大会　1968年
アメリカ合衆国イリノイ州シカゴ
２カ国　アメリカ合衆国26州，カナダ　1,000人

第２回夏季国際大会　1970年
アメリカ合衆国イリノイ州シカゴ
３カ国　アメリカ合衆国50州，フランス，プエルトリコ
2,000人

第３回夏季国際大会　1972年
アメリカ合衆国カリフォルニア州ロスアンゼルス
３カ国　2,500人

第４回夏季国際大会　1975年
アメリカ合衆国ミシガン州マウントプレザント
12カ国　3,241人　12競技

第１回冬季国際大会　1977年
アメリカ合衆国コロラド州スティームボートスプリングス
２カ国　346人　４競技

第５回夏季国際大会　1979年
アメリカ合衆国ニューヨーク州ブロックポート
20カ国以上の国　3,500人

第２回冬季国際大会　1981年
アメリカ合衆国バーモント州スマグラーズノッチストウ
７カ国　600人

第６回夏季国際大会　1983年
アメリカ合衆国ルイジアナ州バトンルージュ
48カ国　4,000人　13競技
日本スペシャルオリンピック委員会（JSOC）初参加
日本選手団６人

第３回冬季国際大会　1985年
アメリカ合衆国ユタ州パークシティー
14カ国　825人
日本選手団８人

第７回夏季国際大会　1987年
アメリカ合衆国インディアナ州サウスベント
70カ国　4,700人
日本選手団30人

第４回冬季国際大会　1989年
アメリカ合衆国カリフォルニア州レノ，
ネバタ州レイクタホ
18カ国　1,000人
日本選手団５人

第８回夏季世界大会　1991年　今大会より世界大会に改称
アメリカ合衆国ミネソタ州ミネアポリス，セントポール
100カ国　6,000人　16競技
日本選手団選手25人，コーチ16人，役員２人

第５回冬季世界大会　1993年
オーストリア　ザルツブルグ，ジェラードミング
63カ国　1,600人
新体制スペシャルオリンピックス日本（SON）初参加
日本選手団選手２名，コーチ３名，役員５名

第９回夏季世界大会　1995年
アメリカ合衆国コネチカット州ニューヘブン
143カ国　7,200人　19競技
日本選手団選手20名，コーチ７名，役員３名

第６回冬季世界大会　1997年
カナダ　トロント
73カ国　1,450人　５競技
日本選手団選手８名，コーチ５名，役員４名

第10回夏季世界大会　1999年
アメリカ合衆国ノースキャロライナ州ローリー，ダーラム，チャペルヒル

150カ国　7,000人　19競技
日本選手団選手31人，コーチ11人，役員3人

第7回冬季世界大会　2001年
アメリカ合衆国アラスカ州アンカレッジ，イーグルリバー
80カ国　3,000人　6競技1公開競技
日本選手団選手10人，コーチ3人，役員2名

第11回夏季世界大会　2003年
アイルランド　ダブリン
150カ国　6,500人　18競技3公開競技
日本選手団選手53人，コーチ20人，役員4名

第8回冬季世界大会　2005年
日本　長野
86カ国　1,829人　7競技
日本選手団選手109人，コーチ37人，役員6名

第12回夏季世界大会　2007年
中国　上海
164カ国　7,500人　21競技4公開競技
日本選手団選手80人，コーチ23人，役員3名

第9回冬季世界大会　2009年
アメリカ合衆国アイダホ州ボイジー
100カ国　2,000人　7競技
日本選手団選手82人，コーチ37人，役員6名

第13回夏季世界大会　2011年
ギリシャ　アテネ
175カ国　7,000人　22競技1公開競技
日本選手団選手52人，コーチ・役員23人

第10回冬季世界大会　2013年
韓国　平昌市　江陵市
113カ国　3,300人　7競技
日本選手団選手60人，コーチ・役員25名

第14回夏季世界大会　2015年
アメリカ合衆国カリフォルニア州ロサンゼルス
164カ国　7,500人　21競技4公開競技
日本選手団選手80人，コーチ23人，役員3名

3.　国内スペシャルオリンピックスの変遷

我が国では，スペシャルオリンピックスの活動について，創設当時の組織と現在の組織が異なる。1980年4月に日本スペシャルオリンピック委員会（Japan Special Olympics Committee = JSOC）が発足した。創設当時から約10年間は，スペシャルオリンピックの名称を使用しており，「ス」の複数形は使用していない。翌1981年10月第1回日本スペシャルオリンピック全国大会（神奈川県藤沢市体育センター）が開催され，その後1991年に第7回大会を大阪で開催し，この大会を持ってスペシャルオリンピック大会は幕を閉じた。

1992年に日本スペシャルオリンピック委員会が解散したが，その組織が最後に派遣した1991年にアメリカ合衆国のミネソタ州ミネアポリスで開催された第8回夏季世界大会にコーチとして参加した中村勝子氏がスペシャルオリンピックスの再興を願い，彼女の地元熊本県の当時の知事細川護熙夫人の細川佳代子氏を頼り，1993年3月スペシャルオリンピックス熊本が設立された。その後1994年11月にスペシャルオリンピックス日本（Special Olympics Nippon = SON）が誕生し，この時を持って，JSOCの活動はSONに引き継がれることとなった。1995年には熊本で全国大会が開催され，以後4年に1回世界大会の前年に，夏季・冬季のナショナルゲーム（全国大会）を2年毎に繰り返し開催している。直近の2014年第6回スペシャルオリンピックス日本夏季ナショナルゲーム・福岡では，水泳競技，陸上競技，バドミントン，バスケットボール，ボウリング，サッカー，ゴルフ，体操競技，卓球，テニス，バレーボール，フライングディスクの12競技とエキシビションとして馬術が開催された。そして2008年第5回スペシャルオリンピックス日本冬季ナショナルゲーム・福島では，アルペンスキー，スノーボード，クロスカントリースキー，スノーシューイング，ショートトラックスピードスケート，フィギュアスケート，フロアーホッケーの7競技が行われている。

上記ナショナルゲームの開催競技並びに地区スポーツプログラムを合わせると，現在の国内普及競技は以下のとおりである。前回のアテネ大会の時と比較すると，柔道の1競技が増えた。夏季・冬季競技合わせると24競技となる。

［夏季競技］
水泳競技，陸上競技，バドミントン，バスケットボール
ボッチャ，ボウリング，自転車，馬術，サッカー，ゴルフ，体操競技，柔道，ソフトボール，卓球，テニス，バレーボール，フライングディスク（国内のみ実施）
計17競技

［冬季競技］
アルペンスキー，クロスカントリースキー，
スノーボード，スノーシューイング，
ショートトラックスピードスケート，
フィギュアスケート，フロアーホッケー
計7競技

4.　2015年スペシャルオリンピックス夏季世界大会概要及び参加状況[20][21]

2015年７月25日から８月２日の９日間，アメリカ合衆国ロサンゼルス市で第14回スペシャルオリンピックス夏季世界大会が開催された。スペシャルオリンピックスは，もともとアメリカ合衆国発祥であり，まずアメリカ合衆国内に浸透していった経緯があるため，これまでの夏季世界大会も圧倒的にアメリカ合衆国国内での開催が多い。今大会で夏季・冬季大会を通して25回開催の内17回アメリカ合衆国内で開催している。

2015スペシャルオリンピックス夏季世界大会　陸上競技
200mで銅メダルを獲得した本県中村有里選手と筆者

4－1　世界大会日本参加競技概況と前年度ナショナルゲーム参加地区状況

水泳競技：
競技日数８日間　初開催1968年
日本選手男子３人，女子３人，コーチ３人
参加国 116カ国　選手数634人
種目〈25種目〉
25m背泳ぎ，50m背泳ぎ，100m背泳ぎ，200m背泳ぎ，25m平泳ぎ，50m平泳ぎ，100m平泳ぎ，200m平泳ぎ，25mバタフライ，50mバタフライ，100mバタフライ，25m自由形，50m自由形，100m自由形，200m自由形，400m自由形，800m自由形，1500m自由形，100m個人メドレー，200m個人メドレー，４×25mリレー，４×50mリレー，４×100mリレー，４×50mメドレーリレー，４×100mメドレーリレー
○スペシャルオリンピックスの発祥当時からある競技であり，陸上競技に次いで参加国，出場選手数が多い競技である。日本国内においてもそれは同様である。ナショナルゲーム福岡大会には，北海道，青森，山形，宮城，福島，栃木，埼玉，千葉，東京，神奈川，山梨，長野，新潟，富山，石川，福井，愛知，三重，京都，大阪，兵庫，奈良，岡山，広島，鳥取，島根，山口，徳島，愛媛，高知，香川，福岡，佐賀，長崎，熊本，大分，宮崎，鹿児島の38地区から参加した。

陸上競技：
競技日数８日間　初開催1968年
日本選手男子４人，女子３人，コーチ２人
参加国 157カ国　選手数972人
種目〈22種目〉
25m，50m，100m，100mWalk，200m，400m，400mWalk，800m，800mWalk，1500m，3000m，5000m，10000m，４×100mR，４×400mR，走高跳，走幅跳，ミニやり投げ，砲丸投，立幅跳，ソフトボール投げ，５種競技
○水泳競技同様にスペシャルオリンピックスの発祥当時からある競技であり，常に最も参加国，出場選手数が多い競技である。日本国内においてもそれは同様である。ナショナルゲーム福岡大会には，北海道，青森，山形，宮城，福島，栃木，埼玉，千葉，東京，神奈川，山梨，長野，新潟，富山，石川，福井，岐阜，愛知，三重，大阪，兵庫，和歌山，岡山，広島，鳥取，島根，山口，愛媛，高知，香川，福岡，佐賀，長崎，熊本，大分，鹿児島，沖縄の37地区から参加した。

バドミントン：
競技日数６日間　初開催1991年
日本選手男子２人，女子２人，コーチ１人
参加国 47カ国　選手数145人
種目〈４種目〉
シングルス，ダブルス，ミックスダブルス，ユニファイドダブルス
○国内では2010年に開催されたナショナルゲーム大阪大会には11地区からの参加があった。2014年の福岡大会では，静岡，新潟，愛知，大阪，滋賀，岡山，愛媛，香川，福岡，長崎，熊本，鹿児島，沖縄の13地区が参加し，多くは西日本という偏りはあるものの，普及地区が微増した。

バスケットボール：
競技日数８日間　初開催1972年
日本選手男子10人　女子10人　コーチ６人
ユニファイドチーム　男子６人　コーチ２人
　　パートナー４人（内女子１人）
参加国 54カ国　選手数624人
種目（２種目）
チーム戦，ユニファイドチーム戦
○国内で，人気競技である。ナショナルゲーム福岡大会には，北海道，秋田，岩手，山形，栃木，埼玉，千葉，東京，神奈川，富山，京都，大阪，奈良，滋賀，広島，島

根，山口，福岡，佐賀，宮崎，鹿児島の21地区から参加した。

ボウリング：
競技日数6日間　初開催1975年
日本選手男子3人，女子，コーチ1人
参加国 50か国　選手数222人
種目（5種目）
シングルス，ダブルス，チーム，ユニファイドダブルス，ユニファイドチーム
○日本国内でも人気競技である。ナショナルゲーム福岡大会には，北海道，山形，宮城，福島，群馬，千葉，東京，神奈川，山梨，長野，富山，石川，岐阜，京都，大阪，兵庫，奈良，和歌山，岡山，広島，鳥取，山口，徳島，愛媛，高知，香川，福岡，佐賀，長崎，熊本，大分，宮崎，沖縄の31地区から参加した。

サッカー：
競技日数8日間　初開催1983年
日本選手男子8人　コーチ2人
参加国 11人制13カ国　選手数220人
　　7人制55カ国　選手数681人
　　5人制32カ国　選手数272人
種目（2種目）
チーム戦，ユニファイドチーム戦
○国内では，近年人気が上がり多くの地域でプログラムが見られるようになっている。ナショナルゲーム福岡大会には，宮城，福島，埼玉，千葉，愛知，三重，福岡，熊本，大分の9地区から参加した。

ゴルフ：
競技日数4日間
日本選手男子1人，パートナー男子1人，コーチ1人
参加国 34カ国　選手数184人
種目（5種目）個人技能，ユニファイド9ホール，ユニファイド18ホール，個人9ホール，個人18ホール
○国内では参加アスリートはさほど多くはないが，ナショナルゲーム福岡大会には，新潟，福岡，熊本，宮崎，沖縄の5地区から参加した。

体操競技：
競技日数3日間　初開催1972年
日本選手男子2人，女子2人，コーチ2人
参加国 34カ国　選手数139人
種目（4レベル10種目）
男女床，男女跳馬，男女鉄棒，男子鞍馬，男子吊輪，男子平行棒，女子段違い平行棒，女子平均台
○国内では参加アスリートはさほど多くはないが，ナショナルゲーム福岡大会には，宮城，東京，大阪，熊本の4地区から参加した。

卓球：
競技日数7日間　初開催1987年
日本選手男子2人，コーチ1人
参加国 70カ国　選手数211人
種目（4種目）
シングルス，ダブルス，ミックスダブルス，ユニファイドダブルス
○国内では参加アスリートは多く，水泳競技，陸上競技，ボウリング，バスケットに次ぐメジャー競技と言える。ナショナルゲーム福岡大会には，宮城，栃木，茨城，埼玉，千葉，東京，神奈川，新潟，富山，石川，岐阜，京都，大阪，兵庫，滋賀，岡山，鳥取，山口，徳島，福岡，熊本の21地区から参加した。

テニス：
競技日数8日間　初開催1987年
日本選手男子2人，女子2人，コーチ1人
参加国　40カ国　選手数142人
種目（4種目）
シングルス，ダブルス，ミックスダブルス，ユニファイドダブルス
○国内では多くの地区でプログラムとして取り組みが見られ，ナショナルゲーム福岡大会には，北海道，秋田，宮城，福島，埼玉，千葉，東京，神奈川，長野，富山，愛知，兵庫，岡山，山口，徳島，福岡，長崎，熊本の18地区から参加した。

バレーボール：
競技日数7日間　初開催1975年
日本選手男子10人，女子2人，コーチ3人
参加国 23カ国　選手数336人
種目（2種目）
チーム戦　ユニファイドチーム戦
○国内では，5地区でプログラムとして取り組みが見られ，ナショナルゲーム福岡大会は，東京，京都，兵庫，熊本の4地区から参加した。

4−2　世界大会実施競技における日本不参加競技の前年度ナショナルゲーム開催競技概況

ボッチャ：
競技日数8日間　初開催1995年

日本選手団参加なし
参加国 96か国　選手数284人
種目（5種目）
シングルス，ダブルス，チーム，ユニファイドダブルス，ユニファイドチーム
○国内では，ごく限られた地域でのプログラムが見られる。ナショナルゲーム福岡大会では，開催されていない。なお，スペシャルオリンピックスのボッチャは，パラリンピック公式競技のボッチャとは，コートやボール等が異なり，ルールもかなり違う。

馬術：
競技日数5日間　初開催1987年
日本選手団参加なし
参加国 36カ国　選手数125人
種目〈5種目〉
馬場馬術，ブリティッシュエクイテーション，ワーキング・トレイル，チームリレー
○国内では，ごく限られた地域でのプログラムが見られる。ナショナルゲーム福岡大会では，エキシビションとして開催された。

自転車競技：
競技日数5日間　初開催1987年
日本選手団参加なし
参加国 34カ国　選手数176人
種目（10種目）
タイムトライアル500m，1000m，2km，5km，10km
ロードレース5km，10km，15km，25km，40km
○国内はごく限られた地域でのプログラムが見られる。ナショナルゲーム福岡大会では，開催されていない。

ソフトボール：
競技日数7日間　初開催1983年
日本選手団参加なし
参加国 8カ国　選手数144人
種目（1種目）
チーム戦
○国内でソフトボールは，手をつなぐ育成会が中心となって古くから取り組みがあるが，スペシャルオリンピックスのプログラムとしては愛知のみでプログラムが見られるだけであり，ナショナルゲーム福岡大会では，開催されていない。

柔道：
競技日数4日間　初開催2003年
日本選手団参加なし
参加国 24カ国　選手数105人
種目（3種目レベル1.2.3）
○国内では，スペシャルオリンピックスのプログラムとしては神奈川のみでプログラムが行われているだけであり，ナショナルゲーム福岡大会では，開催されていない。

4－3　世界大会実施競技における国内未普及競技と今後の展望

ビーチバレーボール：
競技日数4日間　初開催2011年
参加国 5カ国　選手数34人
種目（1種目）
ユニファイドチーム戦
○前回大会から公式競技となっているが，参加国及び選手数も少ない。日本国内のバレーボールの取り組み自体が少ないことから，普及の可能性は低いものと思われる。

新体操：
競技日数3日間　初開催1972年
参加国35カ国　選手数136人
種目〈15種目〉
レベル1A. 1B　ロープ，フープ，ボール，リボン
レベル2　フープ，ボール，クラブ，リボン
レベル3. 4　ロープ，フープ，ボール，クラブ，リボン
グループボール，グループ床
○女子のみの競技であるが，参加国，参加者ともに比較的多いと言えよう。日本国内では，体操競技プログラムは，ごく限られた地域ではあるが行われている。今後，コーチを確保できれば普及の可能性は低くないと思われる。

ハンドボール：
競技日数7日間　初開催1991年
参加国 15カ国　選手数187人
種目〈1種目〉
チーム戦
○参加国数が少ない競技である。日本国内においてもその実践例は，ほとんど聞いたことがない。ハンドボール協会の中にはアダプテッドスポーツとしてハンドボールの普及活動を試みようとしている動きがある。スペシャルオリンピックスは，バスケットボールは設立当初から人気が高い競技であり各地区組織で実践されており，ハンドボールはその動きやルールが，バスケットボールに比較的近い競技であることから，このハンドボールも決して普及できない競技とは言えないであろう。

ハーフマラソン：
競技日数1日間　初開催1991年
参加国 15カ国　選手数28人
種目〈1種目〉
ユニファイドハーフマラソン
○参加国数が少ない競技である。日本国内には，陸上競技人口が多く，特に長距離に取り組む選手が多い。比較的普及しやすい競技であると思われる。

カヤック：
競技日数4日間　初開催2007年
参加国 13カ国　選手数69人
種目〈6種目〉
200mシングル，200mダブル，200mユニファイドダブルス
500mシングル，500mダブル，500mユニファイドダブルス
○参加国，参加者ともに多いとは言えないが，国内でも既に総合型地域スポーツクラブでの実践がなされており，カヤックは多くの地域で普及していると言えるかもしれない。シーカヤック・タンデムのように二人乗りで安定性のある艇で健常者と一緒に始めるケースが多いが，比較的安全にプログラムが始められると思われる。

オープンウォータースイミング：
競技日数2日間　初開催2011年
参加国 35カ国　選手数87人
種目〈1種目〉
1500m
○日本国内では，水泳人口は多い。安全管理体制に万全を期して，指導者が的確にスポーツプログラムを行うことは十分に可能であると思われ，普及が期待できる。

パワーリフティング：
競技日数6日間　初開催1987年
参加国4 1カ国　選手数172人
種目〈5種目〉
スクワット，ベンチプレス，デッドリフト，コンビネイション（ベンチプレス，デッドリフト），コンビネイション（ベンチ，デッド，スクワット）
○世界的に見て知的障害者スポーツとして普及していると言える。一方日本国内でのパワーリフティング競技の普及に関しては，ほとんど皆無といっていい程であろう。例えば，国内普及競技としてかなり浸透している陸上競技や水泳競技のトレーニングの一環として，ウェイトトレーニングを取り入れているということは少なからず聞かれるようになってきたが，安全性の問題やウェイトトレーニング場の使用法やマナー，ルール―等，まずその端緒に就くための雰囲気作りが必要であろう。そのような素地を作りながら，㈳日本パワーリフティング協会の協力を受けながら，プログラムが展開できるように期待したい。

ローラースケート：
競技日数5日間　初開催1987年
参加国 20カ国　選手数110人
種目〈12種目〉
30mストレートレーン，30mスラロームレーン，
100m，300m，500m，1000m，2×100m，2×200m，
4×100m，2×100mリレー，2×200mリレー，4×100mリレー
○日本国内では，ごく一部の特別支援学校や知的障害者福祉施設のレクリエーション的な活動に取り入れられているようであるが，その数は多いとは言えないであろう。しかしスペシャルオリンピックスプログラムとしてスピードスケートやフィギアスケートに取り組んでいることやその夏期のトレーニングの一環として取り組みもあることなどから，ローラースケートにおいてもその指導者さえ確保できれば，今後十分にプログラムに実施ができる可能性はあると思われる。

セーリング：
競技日数5日間　初開催1995年
参加国 9カ国　選手数56人
種目〈4種目〉
レベル1．2ユニファイドチーム，レベル3チーム，レベル4個人
○参加国，参加者ともに多いとは言えないが，日本国内においても，パラリンピックの正式競技であることから，障害者のヨットレースや練習に知的障害者も参加するようになっており，スペシャルオリンピックスの各地区組織において，そのような団体との交渉により，プログラムへの普及が望めると思われる。

トライアスロン：
競技日数1日間　今大会初開催
参加国　6カ国　選手数19人
種目〈1種目〉
水泳750m，バイク11マイル，ランニング5000m
○本大会から初開催となった。リオデジャネイロパラリンピックからトライアスロンが公式競技となったことから，これまで以上に日本トライアスロン連合は，障害者のトライアスロン普及を図っている。当該団体と連携し指導者を確保すれば，そう遠くない将来にスペシャルオリンピックスプログラムとして普及が望める可能性がある。

5.　スペシャルオリンピックス日本と国内未普及競技の展望

欧米では，障害者スポーツはすでに特別なものではなく，アダプテッドスポーツやインクルーシブスポーツとして認知されている。つまり，一般スポーツの一つのカテゴリーとして位置づけられたり，テニスやサッカー，自転車，フェンシング，テコンドー，パワーリフティング等，国際組織が既に障害者スポーツを統合，一元化，連携している例も増えつつある。例えばオリンピック選手とパラリンピック選手が，国内選手権で同じ競技場で同じ期間に選考会が開催されたり，当該一般競技団体主催の選手強化合宿に参加し，同じ時期に同じ場所同じ指導者から指導を受け，競技力向上を図るということが見られるようになってきた。同様に，その競技の普及振興発展も，一般競技団体がジュニア層や一般市民，高齢者と共に障害者をその範疇に含めるようになりつつある。一方，スペシャルオリンピックス日本は，日本障がい者スポーツ協会に加盟しており，その日本障がい者スポーツ協会は日本体育協会に加盟している。言わば，そのパイプはかなり前の段階から通って入るのである。しかしながら，スポーツプログラムの現場でその恩恵を受けるまでには至っていない。まずスペシャルオリンピックス日本が，中央一般競技団体と今以上に具体的連携を図り，指導者の派遣協力を要請すれば，地区組織においても協力要請が行いやすくなるであろう。未普及競技の取りかかりに向けて，一般競技団体からの支援，協力はまさに救いの手となるであろう。逆に捉えれば，これまで健常者のみをその対象とし，障害者スポーツを蚊帳の外としてきた競技団体は，知的障害者をはじめとする全ての障害者をその対象として，その競技の普及振興にあたることは，これからの競技団体としてのむしろ当然の在り方であろう。

一方，地域のスポーツ振興の現場に浸透してきた総合型地域スポーツクラブとスペシャルオリンピックスが今後どのように連携していくかが課題となろう。地域に住む障害者を含む幼児から高齢者すべての住民を対象に，多世代・多種目・多志向性を柱に，文部科学省と㈶日本体育協会が強力に推進するこのスポーツ施策は，今後の我が国におけるスポーツ環境を大きく再構築する可能性を持っている。総合型地域スポーツクラブの中には，スペシャルオリンピックスの国内未普及競技のセーリング，カヤックや馬術等に障害者を含んでの取り組んでいるクラブがある。既に普及しているスポーツプログラムを含め，スペシャルオリンピックスの慢性的なコーチ不足解消につながる可能性は，今後総合型地域スポーツクラブとの良好な関係構築に懸っているとも言えるであろう。

注及び参考文献

(1)　スペシャルオリンピックスの世界大会の名称変遷は，1968年の第1回夏季大会当時，The first International Special Olympics Summer Games という名称で開催され1989年の第4回冬季大会までInternationalを使用していたが，第8回夏季大会からWorld Gamesを使用しているため，本文では国際大会，世界大会と別に表記した。

(2)　Special Olympics World Summer Games
http：//www.la2015.org/about-games/facts-figures
情報取得　2015/12/15

(3)　遠藤雅子（2004）スペシャルオリンピックス．集英社．pp52-69

(4)　Festival Special Olympics Memorial photograph exhibit. 2011

(5)　井上明浩（2011）北陸における知的障害者スポーツの成立事情と展望―スペシャルオリンピックスを中心として―北陸体育学会紀要　第47号　pp43-54　2011年

(6)　遠藤雅子（2004）スペシャルオリンピックス．集英社，pp105-109.

(7)　日本スペシャルオリンピック委員会（1991）第8回国際夏季スペシャルオリンピック大会選手必携.

(8)　SOI（1991）1991 INTERNATIONAL SPECIAL OLYMPICS GAMES Official Program.

(9)　スペシャルオリンピックス日本（1995）スペシャルオリンピックス世界大会報告書.

(10)　SOI（1997）1997 SPECIAL OLYMPICS WOLD WINTER GAMES Official Program.

(11)　スペシャルオリンピックス日本「1997第6回スペシャルオリンピックス冬季世界大会マニュアル」1997年

(12)　スペシャルオリンピックス日本（2000）1999年夏季世界大報告書.

(13)　スペシャルオリンピックス日本（2001）2001年冬季世界大会オリエンテーション資料.

(14)　スペシャルオリンピックス日本（2003）2003年スペシャルオリンピックス夏季世界大会・アイルランド．ファミリー＆応援団用資料.

(15)　スペシャルオリンピックス日本（2005）2005年スペシャルオリンピックス冬季世界大会・長野大会公式写真集.

(16)　スペシャルオリンピックス日本（2007）Rainbow，(17)

(17)　スペシャルオリンピックス日本（2011）x Ⅲ Special Olympics World Summer Games ATHENS 2011 Sport Program.

(18)　SOI（2013）2013 SPECIAL OLYMPICS WORLD WINTER GAMES PYEONGCHANG Official Guidebook

(19)　SOI（2015）2015 SPECIAL OLYMPICS WORLD GAME LOS ANGELES OFFICIAL SOUVENIR PROGRAM

(20)　同掲書(19)

(21)　スペシャルオリンピックス日本（2014）2014年第6回SO日本夏季ナショナルゲーム・福岡　大会プログラム